

広報まるがめ10月号 《ほっとコラム人権》「外してみよう心の“色眼鏡”」

10月1日は「メガネの日」。

10月1日を“1001”と表記すると、両端の“1”が「メガネのツル」で、内側の“0”が「レンズ」に見立てられ、メガネの形を表しているとして「メガネの日」が制定されました。

自分自身を含め、家族や友人、職場の同僚など、多くの人がメガネを着用しており、メガネがないと生活に支障が出るという人もいます。しかし、メガネをかけているからといって、相手への接し方が変わってしまうことはありません。

ところが、それが“メガネ”から“車椅子”に変わるとどうでしょうか。

メガネと車椅子のどちらも「それがなければ生活に支障が出てしまう」という点は共通していますが、“車椅子”を利用している人を見ると、「何かしてあげないといけないのではないか」、「どう接していいかわからない」などと考えてしまう人がいるようです。

では、なぜメガネと車椅子で見方が変わってしまうのでしょうか。周囲に車椅子を利用し生活している人をあまり見かけない（見慣れていない）ことが要因の一つとなり、「障がい者」というフィルターを通して見ることで、「何かしてあげないといけない」という先入観を持つてしまうのではないのでしょうか。

車椅子に限らず、白杖や補聴器などを利用し、自立した日常生活を送っている人に対する周囲の手助けが必要な場面は、数多くあると思いますが、「何でもしてあげないといけない」ということではありません。どんな手助けが必要なのか、コミュニケーションを取りながら接することを心掛けていれば、自然と障がいに対する“色眼鏡”は外れていくのではないのでしょうか。